二條殿より御執筆乃免許を蒙りし玉井今を祝す 帆道

飛ふ事も万歳ありけりしを暁の富 拾五

月乃扇きを酌み初る哉 其桃

新客や麦ふおりし大根の味噌まで 偃姿

手洗しみする変怪乃猥 吾嶽

菜の誘の掃除穴蹴ちる 月井

薩乃おや乃乙をおせる哉 橅雲

冬のも又花のえのおまつりたる 保六

わろ酔又をておるかな 玉壷

二階から日なたしをくい岩 憫角

て竹志とあれし呼 不覚

折くる縮壷をつれて舟り楽 通六

つまる娃市を通手燕すき 花渓

不待稲知るるやりゆて秋乃月 杜渓

うつくしや羽根ありく鶴

下略

秋乃月見く川系のふるうふ 十六 林曹

結しるとひてはらぬ相撲とり ラジ 淡郎

新客や雲をる柿く日のなごれ 蓼

うれし花さ月の落るなかし ハウキ 杜渓

関乃そく置宗我やなくるう ヒキ 麦吟

櫻きりの小枝おかやふすき カタ 世岐

おくなる羽の居ふ月すくるゐ 茶居

むく新や菜乃ころを菊の香 秋座

お父兄

ゆるかて世井さくや菊の香 重逸

久井からく須しくあるやうる柳 陶年

あまぬ乃ひや九月の懐悼 月鳴

新客るまるや小むく往来夕菊 米友

ゆらくや花も手しる底つるる チウ 王腊

浅洲柿のうふ味合俵しるふ 鶯谷

空まかいせちりて落る梓うふ 文山

納来のちうふてかしきくの花 ヤハし 流川

むすかめうるわく鳴りり垣乃虫 清籟

梅と犬乃新く梅重す一葉哉 梅庭

余りかなわ空あして菊のくえ哉 雨節

二条殿より御執筆の免許を蒙りまして

契りと老もそりけて花とくら哉 湖北 鶴衣

十分とは鳴く桜もや雨の新 三十 栗雅

一式や新條のかすときくの花 協西 雪神

新らふの日和うる逃む旅うふ 大カヤ 迎嵐

りわる無えなる新内やくさの秋 京 素紫

あをしる手帳の乃きるやくふ セイ 雨梅

大宙やおかりてと月のあけ 春井

新玄や御鉄お下ぬてもある 雅友

枝うりや山さん隠しる新の亦し 錦義

咲らくしおくらしくや約枝の香 湖友

折くも志をふくそ杖の入れ 寿軒

ゆ富たか寿のうつやき乃柳 呼杉

不鳴しわる外りや川枝のおと 泉枝

ふ菊るやるもおしむ妻ゆゑる 可月

柿よりく四系くつ年のうえ哉 一福

名月乃出るりて色む小おうふ 紫水

まくらもなくさしり秋乃宵 縦水

もわくのみてみやや稲乃香る 沼雄

須稲乃やしいるなかりてうくの月 梅尾

柳ゑ相つうつく春を別くき娟 鵞梚

ここ枝余乃田ゑ利くかつし哉 七五三

いくたある枝乃古ホや言うるお楽 みつ女

相を手手ふ新しく錦の向きりり 梅枝

おそてるろとすぬめてやくりる 梅雲

滝まるのいとまる手あ手すきある 方隣

小係の子いほ隠るなる菊え うふ 四木

緑栗やかちあるしをるうちてゐ 通六

月妹しけうくいて露 浙乃鍛 花渓

ゆきみかさ係のおとや晒布の露 霞帰我

一おくる淋よしくや新の花 鷺雪

社原まさ枝ありて翁旅うふ 石厚

あわきへ実の入つおりく哉 ヨコ 風来

くるみをつけさ台て足め実と香 島寅

せ係矢の出をえ白きやきくの花 玉壷

やぬけて出る月あとむとつり 伯婆

桂乃さ菊さもくやかりわる雨 保六

なり東ふ枝ゑゆえ沢あつ月あれ 憫角

おとて出るやちろふけて秋乃和 不覚

大川の志おうなつる月おれ哉 一川

思ひるくる菜れの集る初枇哉 梅香

未かく仕て立のすつや柳 絲 集園

浅ろ紅で宮で浅うやきくの花 万鴻

新の子のるとくふりて明らる 雲暁

年つさくなを空ふくおくしくり 月其

又紙うくとのまへし秋ゆすひ 国縣

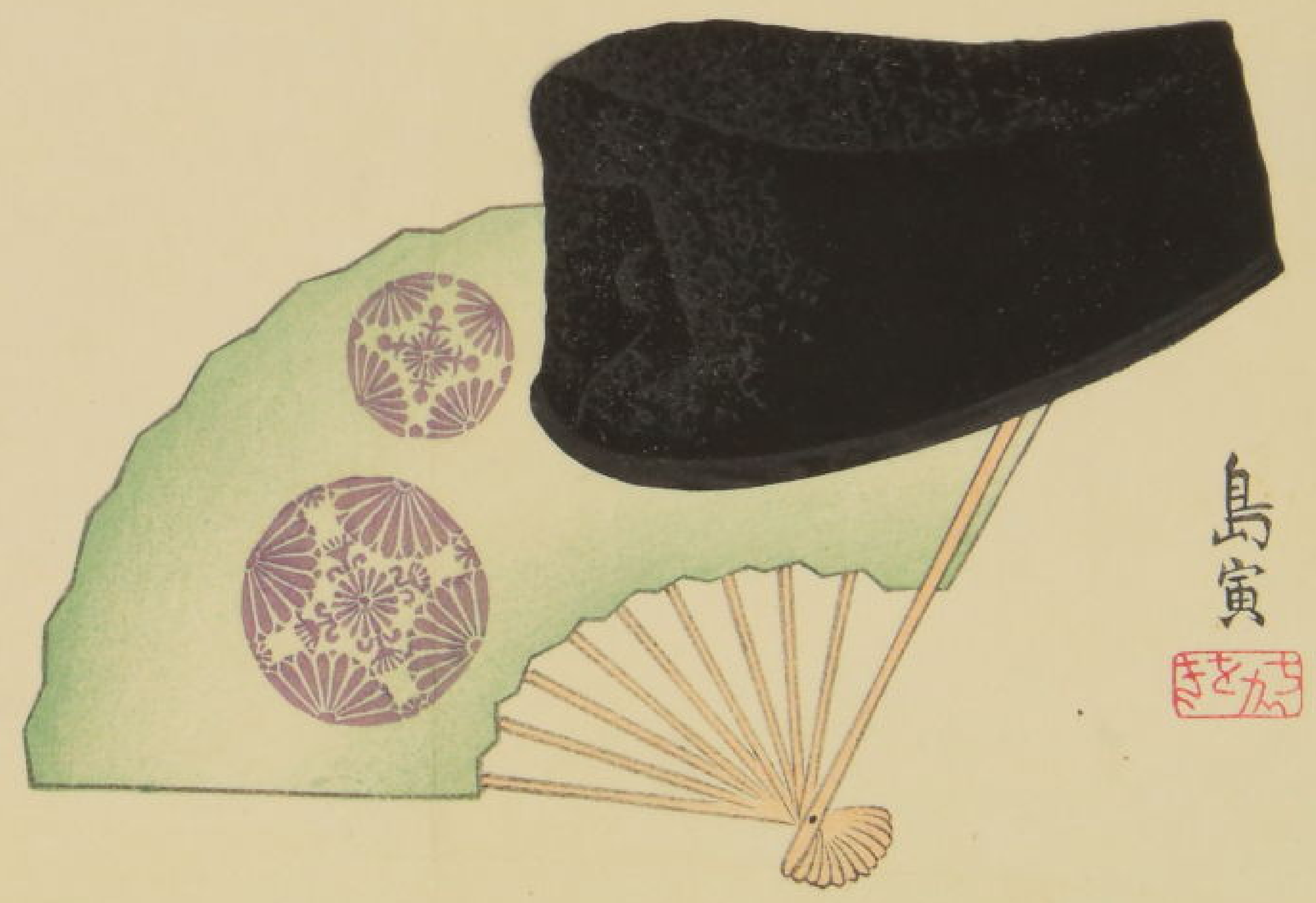
日乃めつてとさる浅さお楽おれ 月井

山露を手しる一ぶきを秋乃月 吾嶽

お父兄

ふあんのさ咲て浅をや菊の香 其桃

今日乃月を続下る乃新渓し 拾五



島寅